The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	英語のメディア授業 ： 試行錯誤の半年間
Author(s)	小杉, 世
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2020, 21, p. 21-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83273
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

英語のメディア授業——試行錯誤の半年間

小杉　世（大阪大学　言語文化研究科　言語文化専攻）

1. はじめに

コロナウイルスの感染の影響で、4 月 7 日に緊急事態宣言が出て、大学院授業も含め、当面（4 月中は）オンラインでという通知で始まった今年度の春夏学期の授業、4 月 21 日に「今学期中は基本的にオンライン」という大学方針が決まるまでの 2 週間ほどは、4 月 9 日からオンラインで始まった大学院授業で Zoom の同期型授業を試しながら、サイバーメディアセンターの言語教育支援研究部門主催のオンライン授業のゲリラ講座（のちに「＋α講座」に改名）や全学教育推進機構の FD に参加しながら、何を使って何ができるかを考え、半年間の授業計画を立てるのは大変だったが、今まで知らなかったツールについて学ぶのは同時に楽しくもあった。昨年まではメディア授業とは無縁で、CLE もロイロノート・スクールも HALC 教室や LL 教室も使用したことがなく、CALL 教室もアクティブ・ラーニングなどの英語カリキュラムがまだなかった 20 年近く前の赴任当初に 2 回使用したきり、（「助けを呼ぶから CALL」と駄洒落を言いたくなるほど不慣れな者にはシステムのトラブルも多くて）メリットを活かせず再び使用したことのない私のようなメディア授業初心者が、悩みながらも何とか今学期の授業をやり過ごせたのは、サイバーメディアセンターの言語教育支援研究部門のスタッフが続けてくださっている＋α講座のおかげである。実践的なサポート体制が整わない大学もあるなかで、阪大はかなり恵まれていたといえるだろう。ここで少しメディア授業の半年間をふりかえってみたい。学期の終わりに Google Form で行った無記名の授業アンケートで得た声にも、一部ふれる。

2. 担当科目について

私の担当する共通教育科目は、総合英語（Liberal Arts & Sciences）のクラスで、4 コマは 1 年生、1 コマが 2 年生のクラスで、工・医薬基・医歯薬・理工など理系のクラスが多いが、新カリキュラムでは文法基のように理系・文系混交クラスもあり、プレゼンテーションでは、それぞれの専門の分野にも根ざした関心のあり方の一端が見えて興味深かった。総合英語（LA&S）は、クラスサイズが 45～50 人と比較的大きいため、オンライン授業で毎回の課題評価が必要になると、期末試験の占める成績評価の割合が高い従来の対面授業に比べて、教員が授業に費やす時間は何倍にもなり、ブレイクアウト・セッションも工夫が必要と感じた。

オンライン授業の形態は、扱う教科書によって、決めた。教科書の内容が比較的容易で、議論やグループワークに向いた内容の教科書を指定していたクラスでは Zoom を用いた毎週の同期型授業を行い、一方、英文や内容が難解で細かく丁寧に英語を読み解く必要のある教科書を指定していたクラスでは、予習の提出物にかかる時間が通常より長くなることが予想されたので、学習の総時間量のバランスをとるために、Zoom 授業を毎週は行わず、毎週の（短めの）講義配信＋3 章進むごとに Zoom 授業で小テストという非同期・同期型折衷授業を行った。ツールとしては、どちらも、Zoom、CLE、ロイロノート・スクールのほか、テストツールの Socrative と Kahoot!、Google Form、Line オープンチャット、（一部のクラスで補助的に）Flipgrid を用いた。これらのツールは＋α講座で教えていただいたものである。

3. 同期型授業

3.1 ワークフローと評価方法

同期型授業の流れとしては、予習の提出物を前日 18 時までにロイロノート・スクールに提出させ、サンプルとして授業で扱う学生の提出物に一部赤を入れておき（正解には✓、誤答や検討が必要な箇所に下線など）、授業開始時に提出箱の共有をオンにして、

学生の提出物をクラスで共有しながら解説、その後、ブレイクアウトルームでディスカッションを行った。セッションが終わった後、その日のグループリーダーによる報告、「役に立つ情報」(3.3 参照)の投稿者のうち、数名に内容の発表(紹介)をしてもらい、授業終了後、その日のうちに復習ファイルをロイロノートに提出させるという手順で行った。予習の提出物は、授業開始時に提出箱の共有をオンにするまで、遅延でも提出可とした。提出箱を共有することで、クラスメイトの提出物を参照し、互いに学び合うことができる。予習の提出物は、DVD を視聴し、Reading Passage を読んで、それぞれの内容の短い要約を作成し、各セクションの練習問題を解くというもので、復習は授業を聴きながら予習の提出物に赤を入れたものを提出させた。

授業の時間配分としては、予習の提出物の共有による解説が 30 分程度、ブレイクアウト・セッション 15〜20 分、グループワークの報告発表と「役に立つ情報」の発表 20 分程度。復習の提出箱は授業解散時に作り、Zoom 授業解散のあと、授業終了時までの 10 分ほどの残り時間(質問受付時間)を利用して提出するようにすすめたが、欠席者のために提出期限はその日の 23:59 とした。欠席者が授業の長い録画を見るのは効率がよくないと思われ、国外から受講している留学生のなかにはインターネット環境が整っていない学生もいたため、Zoom 授業の録画配信は行わず、欠席者はロイロノートの共有した提出箱の私が赤をいれたサンプルの学生の提出物を見て、自分の提出物を自己採点して提出させた。

評価の内訳は、課題提出 50%、プレゼンテーション録画 15%、期末試験 25%、授業貢献度 10%とした。授業貢献度は、必須ではない提出物(「役に立つ情報」)の自主的な提出や授業中の発表などの評価である。

3.2 ブレイクアウト・セッション

同期型授業のクラスで使用した教科書は DVD 付属の教材で、各 Unit が①DVD Activities、②Reading Activities、③Further Activities に分かれている。このうち、Conversation (Unit のテーマについて学生同士が話しているという設定の会話を完成させる英作文問題)と Related Data and Discussion(データやグラフを見て議論する)からなる③を材料に毎回ブレイクアウトでグループワークを行った。Related Data and Discussion の問題には、考察のための質問が設置されているので、何について話し合うか、学生が迷うことがない。予習で提出した互いの解答をロイロノートで比較しながら話し合うこともできる。また、時間が余れば、「役に立つ情報」についての情報交換や、③の Conversation は英作の解答を確認して読み合わせをするだけでなく、自分たちの会話文をつくることもできる(が、そこまでは進まなかった)。

4〜5 名ずつ分けても 10 のグループになるので、すべてをまわり切れないこともあるが、セッションのあとの発表では、まわれなかったグループから先に当てた。グループをまわったときに面白い議論を耳にしたときには、あとで発表のとき、その点について触れてもらった。学期中にできるだけ多くの学生と話をする機会をもてるように、毎週、ランダムにグループわけをした。プロジェクト型アクティブ・ラーニングのように、同じグループで、ひとつのテーマについて、議論を重ね発展させることはできないが、Unit ごとのテーマについて、英語の学習を通して、様々な知見を広めることはできる。

初回授業では、私が説明してもロイロノートの使い方がわからなかった学生がクラスメイトに聞いて解決することもあった。毎週 Zoom で集う同期型授業では、ブレイクアウト・セッションでのコミュニケーションもおおむねリラックスして行っているように見うけられた。アンケートでは「教科書の内容に踏み込んだ発表やディスカッションは経験したことがなくとても楽しかった」という声があったが、一方で「ブレイクアウト・セッションではなかなか会話が始まらなかった」という声もあり、グループによってはリーダーの進行がうまくいかなかったり、話しづらさを感じている学生もあったようだ。

3.3 ロイロノート・スクールと CLE の活用

課題の提出にロイロノートを使用したのは、手書きの場合もスマートフォンでロイロノートを使用すればカメラで撮影してそのまま提出箱に入れられる

こと、提出物の共有がしやすいこと、iPad や iPhone のアプリをログインしたままにしておけば、いつでも簡単に各授業の提出箱を開いて確認できること、カメラ機能のほか、ウェブカードや地図カードの作成など便利な機能があり、使用していて楽しいという感覚があるからだ。

一方、授業スケジュールの PDF や教材資料、講義配信リンクの提示や連絡は、CLE を用いた。連絡事項は後から登録した学生や、メールを紛失した場合も確認できるように CLE 連絡事項に掲載し、「メールでも送信」に✓を入れる形で行った。

CLE の掲示板に「質問コーナー」を設けて、クラスメイトの質問に答えた学生には加点することにしたが、同期型授業では利用者がなく、Zoom に入れない場合のバックチャンネルとして用意した Line オープンチャットのほうが、技術的な問題についてクラスメイトに質問したり、教師宛だがクラスにも知らせたいことなど比較的気軽に投稿できるようだった。4 節の折衷型授業では、CLE 掲示板の「質問コーナー」に良質の質問の投稿もあり、詳しい回答をすることで講義配信を補う議論ができた。

ロイロノートは、最初は慣れない学生もいたが、提出がしやすいという声が多く、「授業で使用したツールのなかでよかったものは」というアンケート項目ではロイロノートが 1 位であった。同期型授業で人気があったのは、「役に立つ情報」（Unit のテーマと関連する記事や動画、Web サイトなどを予習の過程で探して提出する）の提出箱だった。この提出箱は最初から共有をオンにしているので、例えば、「カンボジアで地雷の撤去にネズミを訓練しているという動画です」という投稿のあとに、「ネズミも使用されているようですが、こちらの方法のほうがより確実です」という投稿があるなど、一種のコミュニケーションが成り立つ。教師のみが参考資料を提供する場合よりも、ずっと多様な資料が集まり、私自身も楽しみであった。ただ、授業でコメントするために提出された材料に目を通していると、TED スピーチ動画などもあるので、すぐに 1~2 時間が経ってしまう。必須の提出物ではないが、同期型クラスでは、毎回 1/3 から半数くらいの学生が提出していた。

授業でロイロノートの提出物に赤を入れながら説明するとき、ロイロノートの「画面配信」機能を使用すると、学生のインターネット環境によっては表示されないこともあり、個々に手元で開いてもらうことが多かったが、Zoom の共有機能で iPad を Airplay（あるいは有線）で画面ミラーリングすると、学生が自分の提出物を開きながら、黒板を見るように比較できるので便利だとわかった。

3.4 プレゼンテーション動画

プレゼンテーション動画の提出は、学期の中間で行い、評価のポイントやスピーチを構成する場合の注意事項を 3 週間ほど前に授業で説明し、早くから準備させた。授業で扱うテーマに関連するトピックでも、全く関連しないものでもよいので、各自が最も興味をもつことについて、自分の考えを 90 秒のプレゼンテーション動画にして提出させ、その週は Zoom 授業を行わず、かわりにクラス全員の動画を視聴し、CLE コンテンツにアップロードした評価シートに、1～5 の評価とテーマ、コメントを短く記入して PDF にして、ロイロノートに提出させた。また評価シートとは別に Google Form でベスト・プレゼンターの投票を集計し、提出箱の動画に「1 位〇票」などの書き込みで 5 位までの結果を発表した。新入生たちは春夏学期、キャンパスに入ることもできず、対面で話す機会もなかったので、学期の途中で、プレゼン動画のピアレビューをさせることで、クラスのメンバーがどんな関心をもっているのか、互いを知ることができ、学期後半のグループワークのコミュニケーションがとりやすくなると考えた。

結果としては、対面授業でプレゼンテーションをさせる場合よりも、録画提出のほうが、おそらく自分の録画を確認して何度か取り直しているので、より完成度が高かった。発音・声の抑揚・ジェスチャーなど洗練度の高いものもあり、録画映像に字幕をつけたものや、パワーポイントや手書きイラスト、黒板ツールやフラッシュカードを効果的に用いるなど、それぞれの個性を生かした工夫がなされており、ピアレビューも対面授業内で行う場合（50 人の発表を 1 コマの授業で聴きながら評価シートにメモをと

る）よりも丁寧になされていた。対面授業では、自分の発表の番が回ってくるまで落ち着いて人の発表を聴けないが、動画を視聴して評価する場合は、人の発表を楽しむ余裕があるのだろう。投票の結果は得票した学生には励みになるらしく、その後の授業参加態度が向上した学生もいた。

3.5 オンラインテスト

オンラインテストは授業のなかで、一番課題（問題点）の多い部分だった。同期型授業の学期末の試験には、Socrative と Kahoot!を用いた。文章を書く力は、学期はじめの補講分レポート（YouTube や Vimeo の英語動画を 2 つ指定して、そのうち 1 つを選択し、内容の要約と感想を英語でまとめる）で評価できるので、期末試験は学習内容の定着の結果が自動採点で客観的に点数化される方法を選び、なかに一部、教員が採点する記述式の問題を設けた。

Socrative では T/F、Multiple choice、短文自由記述の 3 種類が可能で、写真やグラフの挿入もできる。写真が表している状況をテクストの内容に沿って正しく表記している英文を選択する問題、グラフから読み取れる情報を正しく記述している英文を選ばせる問題（複数選択可能）や、教科書の内容を思い出しながら、写真を説明させる問題などを作成した。オンラインテストでは、教科書を参照もできるが、タイマーを Zoom で表示し、時間制限を設けたので、普段の学習で内容が定着していないと教科書を見て調べている間に時間切れになる。（「テストはもう少し時間がほしかった」という声もあった。）

Socrative は同期型でしか使用できないが、作成が簡単で、学生のログイン状況や、クラス全員の回答の進行状況をリアルタイムで教員が確認できるのが極めて便利だった。4 節の折衷型授業のリスニング問題など、Zoom で音声を共有して解答するときは、とくに進行の調整がしやすい。有料版では複数の Room を作成して、学生を登録できるので、学生番号でログインさせると、成績処理もやりやすかった。

Kahoot! では動画埋め込みの問題を作成した。Kahoot!は対面授業でゲーム感覚で競わせたり、課題として自習学習の一端にするためのツールだが、今回は Assignment の設定（期限 1 日）にして、授業中に一斉に行って終了するという形で、テストとして活用した。Kahoot!は mp3 を埋め込めず、動画は YouTube 経由での取り込みとなるため、各 Unit のタイトルを記入したロイロノートの色カードに、Unit の内容に関する質問とその答えとしての 4 つの選択肢を英語で録音し iPad で書き出した mp4 動画を YouTube にアップロードして取り込んだ。手間は少しかかるが、Kahoot!の画面とロイロノートの色カードの配色がとてもよく合う。動画は 15~25 秒程度で、一つの Kahoot!に 20 問を作成した。1 問ごとのタイム設定は 30 秒にしたが、実際に行ってみると、学生のインターネット環境によっては、動画再生が開始されるまでに数秒かかり、一方、Kahoot!のタイマーは進んでしまうため、最後の選択肢を聴き終わらないうちにタイムアウトになるケースがあり、時間を長めに設定する必要があることがわかった（再挑戦の課題として課すときにはタイム設定を修正した）。最初のクラスでの失敗は、テスト中に不具合が生じた学生に Zoom のチャットではなく、うっかり声に出して対応したため、Zoom の音声が Kahoot!の音声とかぶり、ほかの学生たちの妨げになったことだ。説明後 Kahoot!を問題なく開始できたら、学生には Zoom から一旦退出させて、問題が生じたときに Zoom に戻ってくるか、Line オープンチャットなどで対応すべきだった。次のクラスではそのように対応したので、問題は生じなかった。2 種類の異なるテストを用意したのは、どちらかに不具合が生じた場合でも、一方のテストで評価ができると考えたからだ。オンラインテストは、あらかじめ何回も検証していても、当日、予期できない不具合が生じる場合がある。Kahoot!はインパクトがあって面白く、リアルタイムでも課題としても使用できる点が便利だが、動画埋め込みのクイズは（軽い動画なら大丈夫かもしれないが）同期型オンラインテストよりも、自習課題として活用するのがよいかもしれない。

4. 非同期・同期型折衷授業

非同期・同期型折衷授業では、【学生】予習の提出物（本文全訳と練習問題の解答）を授業の曜日時限

の終了時刻までにロイロノートに提出→【教員】講義配信リンクを期間限定で CLE にアップロード→【学生】講義を視聴＋復習の提出物（予習の提出物に赤を入れ、練習問題部分は講義配信の説明を聞いて自己採点）→3 章ごとに Zoom 授業で小テスト（学期に 3 回）→【学生】スピーチ動画提出と投票という流れで行った。復習の提出期限は、3 章ごとに行う小テスト実施日の 23:59、講義配信リンクの有効期限はその 3 日後くらいに設定した。

講義配信は、パラグラフごとに見出しをつけて説明を録音したロイロノートの色カードをつないで iPad で書き出した mp4 動画を Google Drive にアップロードし、ダウンロード不可（視聴のみ）のリンクをつくって CLE コンテンツに掲載した。45～50 人程度のクラスでもアクセスの集中によるエラーはなかった。反省点としては、音で聴いてわかりにくい言葉や、理解しにくい文の構造の説明など、もう少し視覚的な情報を多く入れ込むほうがよかったかもしれない。予習にかなり時間と労力のかかる難しい英文の教科書だったので、復習の提出物は、講義配信を止めながら繰り返し聞いても 40 分以内で作成できるように、20 分程度の動画にまとめたが、かなり講義内容をそぎ落とすことになり、背景の説明や余談なども多く入れてほしかったというコメントがあった。「予習は鬼のように大変だった」という感想もあり、「やり通せたという達成感はあった」「英語を読む体力がついた」などの声はあることながら、相当しんどかっただろうという反省はある。教員のほうも、1 回の講義配信の作成に最短で 5 時間、場合によって週末のほとんど一日がつぶれることがあった。予習に要した時間を選ぶ設問で 2 時間以上が 70~80%、学習総時間は、2~3 時間から 4~5 時間が多く、5 時間以上も数名いた。（教科書の難易度と課題の性質の違いによるが、同期型授業は総学習時間が平均 1~2 から 3~4 時間で、2~3 時間が最も多かった。）

折衷型授業では、提出物（60%）、3 回の小テスト（15%）、スピーチ動画（15%）、授業貢献度（10%）で評価し、期末試験にあたるものは行わなかった。小テストには Socrative を用いた。Part1 が内容についての正誤問題（時間制限を設けた）、Part2 は章の内容に関連した英文を聴きながら空所に単語を記入するディクテーション、Part3 は英語音声を聴いて答える T/F、Multiple choice 問題で、音声は教科書の練習問題の教師用 CD にある mp3 を利用した。Socrative は解答しやすいとの評価が多かったが、初回小テストの最初のクラスでは、メモリー不足のノート PC で Zoom の音声共有がうまく行かず、16GB メモリーのデスクトップ PC にウェブカメラをつけて Zoom 授業を行うようになってからは、問題なかった。テストツールについては、問題が生じたクラスと一度も生じなかったクラスで学生の評価がわかれた。

3 章ごとに行う Zoom 授業では、質問を受け付けてから小テストを行い、その後、「役に立つ情報」の投稿者による発表と教員のコメント、それに関連して、学期末のスピーチ動画の作成に向けて、議論してほしい事項について、ブレイクアウト・セッションを行ったりした。ただ、この授業の教科書は抽象的な思考を必要とする内容だからか、予習の提出物が大変すぎて余裕がなかったのか、「役に立つ情報」の投稿がほとんどないクラスもあり、ブレイクアウト・セッションは少しやりにくかった。毎週の同期型授業のほうが、次第になじみが出てくるので、ブレイクアウト・セッションは、やりやすい。しかし、非同期・同期型折衷授業でも、全体での議論が比較的よくできたクラスでは、スピーチ動画のベスト・スピーカー投票のピアレビューで「一度ブレイクアウトで一緒になったとき、このトピックについて深く考えていることがわかった」というコメントもあり、「役に立つ情報」の投稿で調べたことと授業での議論を発展させて、スピーチ動画につなげている学生や、教科書で学んだ内容を効果的に引用しながら、こなれた形で理解し、自らの意見をまとめている優れたスピーチ動画も成績上位者にはみられた。

この折衷型授業のスピーチ動画（1 分～1 分 90 秒）は、授業で学んだことをいかに自分のものにして、それについて自分の考えを明瞭に述べられるかを主なポイントとした。提出にはロイロノートを使用したが、若干名、動画サイズを小さくしてもアップロードに問題が生じたので、動画共有のコミュニケーション・ツール Flipgrid にもクラスの学生登録をし

ておき、ロイロノートに提出できない場合はそちらを利用するように指示し、クラスにも Flip Code を知らせて閲覧できるようにした。学期の中間で行った同期型クラスのプレゼンテーション動画の評価シートは、PDF にしてロイロノートに提出させたため、コメント部分を集計してフィード・バックすることができなかったが、この折衷型クラスのスピーチ動画は、ベスト・プレゼンターの投票の Google Form にコメント欄を設け、得票者ごとに集計して CLE で結果を発表した。

非同期・同期型折衷授業のクラスでは、予習の量が多いと感じた学生が多かったが、3 章ごとに Zoom 授業・小テストというペースはちょうどよく、全体としてバランスがとれていたという声や、「自分のペースで学習できるよさがあった」という学生もいた。グループワークを伴う同期型クラスでは、発達障がいの学生の履修が困難な場合もあるが、同期型と非同期型のクラスの選択や組み合わができることで、バランスがとれるのかもしれない。

5. おわりに

今学期は対面での学生同士のコミュニケーションが行えない状況において、授業内でのブレイクアウト・セッションや提出箱の共有を通して、少しでもコミュニケーションがとれるように意図した。学生からのメールにはたとえ短文でも、すぐに（忘れないうちに）返信するように心がけ、テスト前には操作方法と準備に関して詳しい説明を CLE 連絡事項を通して行った。「教師とのコミュニケーションはとれたか」というアンケートに対して、同期型授業では「必要なときは問題なくとれた」が 80~88%、「よくとれた」が 12~20% に対して、折衷型授業では「必要なときには問題なくとれた」が 60%、「あまり必要なかった」が 30~33%、「不便だった」も 2~9% あった。とくに学生同士のコミュニケーションは、折衷型授業のほうでは、十分には達成できなかったかもしれない。オンライン授業一般の問題点を挙げてもらったなかには、ネットワーク障害のほかに「質問がしにくい」という声もあった。

今学期の授業は、常に自転車を必死で漕いでいるという感じで 1 週間があっと間に過ぎ、とくに後半は講義配信などが追いつかなくなることもあったが、今回のコロナ影響下でのオンライン授業の経験でよかったと思うのは、面倒くさがりの私が、大抵のことは面倒と思わなくなったことだ。今学期にもらった学生からの声を参考にしながら、秋冬学期はもっと効率よくできるところはやっていきたいと思う。うれしかった瞬間は、教科書が入手できず学期はじめに対応に苦労した留学生などがブレイクアウトルームで楽しそうに進行役をやっているのを目にするときなどであった。春夏学期は、国外から受講していた共通教育授業の留学生のほか、言語文化専攻の大学院の授業でも、普段は実験で忙しくて受講できないだろうと思われる理系の博士後期課程の留学生が受講していたり、日本に入国できず国外から受講した研究生もいて、英語での大学院授業は準備が大変だったが、私よりも英語が流暢かもしれない留学生のおかげで、面白い議論ができたのは、何よりの喜びだった。コロナ禍で国境が閉ざされるなか、オンライン空間では、これまで以上に世界が近くなる可能性がある。この半年は共通教育授業について、今までに以上に考えをめぐらし、大学とはどういう役割を果たすものか、授業とは何かという本質的なことについても考える機会となった。今回のオンライン授業での気づきは、今後の対面授業にも活かせるだろう。私の担当語学科目は英語だが、＋α講座で紹介されたツールのなかには、前々から取り組みたいと考えているマオリ語などのオセアニア言語の学習教材づくりに役立ちそうなものがあるとわかったのも収穫だった。失敗も多々あったことながら、辛抱強く学期の終わりまでついてきてくれた学生たちに感謝する。またテストツールのライセンスを使用させてくださったサイバーメディアセンターと＋α講座でサポートを行ってくださった方々にお礼を申し上げたい。

参考文献

[1] 「特集：変わりゆく外国語教育環境について」『サイバーメディア・フォーラム』No.19, 2019 年 2 月, pp.3-30.